

感動一点 の場

『静物—梨と葡萄—』（色紙）

年不詳 小川原 脩 画

北海道に美術館を、と美術館建設運動が本格化したのは1960年頃からだった。建設資金造成の小品展が開催されたのもこのころである。その後、札幌をはじめ、小樽、旭川、釧路、倶知安などで資金造成のための色紙展などが開かれるようになった。北海道美術館建設期成会の委員を委嘱された小川原も、小品展や色紙展に自らの作品を出品しながら、後志支部の責任者として色紙展の開催に取り組んでいた。また、小川原の作品を求めた人たちへと色紙に動物や静物、さらに山麓の風景を描いた。色紙には油絵にはない雰囲気がある。絵筆の運びが滑らかで、瞬間の情景が表現されるのである。壁紙のような格子柄を背景に茶と緑の丸に黒く太い線を付け足しただけなのだが、梨と葡萄なのである。この季節額に入れて壁にかけておきたい作品である。



ふる探訪 さと

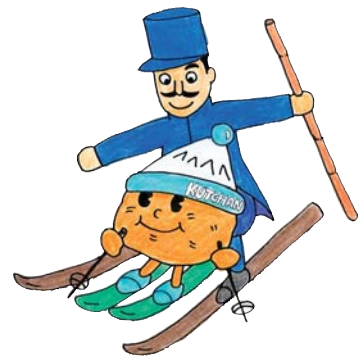
あの時代 この時代

その39 『全日本規模のスキー大会』 昭和10年代～30年代

354回



◀ 第40回全日本スキー選手権大会開会式（昭和37年3月9日）



今年はスキー伝来100周年

昭和3年3月2日、秩父宮殿下はニセコアンヌプリへスキー登山。翌日、チセヌプリへのスキー登山を決心しましたが、猛吹雪に遭遇しあわや！遭難かという事態になりました。しかし、宮様のニセコでのスキーがさらにこの地でのスキー熱を一層高めることとなりました。昭和7年に後志スキー連盟が発足し、昭和10年1月には大仏寺山（現旭ヶ丘スキー場）で初めての公式スキー大会第13回全日本スキー選手権大会後志地方予選会が開かれ、昭和13年1月、山田温泉裏の比羅夫コースで第11回全国学生スキー選手権大会が開かれるや、倶知安は全道、全国規模のスキー大会などの開催地として注目されるようになりました。戦時中スキー大会は自粛するが、戦後再び各種スキー大会が開かれ冬のスポーツとして、スキーは活気を取り戻しました。昭和36年、当時延長距離日本一とうたわれた比羅夫コースにリフトが建設され、それを契機として翌37年第40回全日本スキー選手権大会アルペン競技が開催されました。ニセコヒラフスキー場発展の一步を踏み出した。